

補論 モルディブ共和国

モルディブ共和国はスリランカ南西のインド洋に浮かぶ 26 の環礁や約 1,200 の島々から成り、約 200 の島に人が住む。高温多湿の熱帯気候で、面積が 7.8 km² を越える島はなく、海拔の最高が 2.4m という平坦な地形である。モルディブ共和国はインドとスリランカの南西に位置するインド洋の島国（約 300 km²）、人口は約 40 万人（2010）である。英語名の Maldives はサンスクリット語で「島々の花輪」を意味する Malodheep に由来するとされ、珊瑚礁の島々が輪を描くように並んで浮かんでいる様子をたとえたものである。

6 世紀頃、セイロン（現スリランカ）から仏教徒の人々が移住してきた。1153 年、アラブ人がイスラム教を伝えた。1558 年にポルトガルがマレを占拠、1645 年にオランダの保護国、1887 年にイギリスの保護国となる。1965 年にスルターンを元首とする君主国（モルディブ・スルターン国）として独立。首都マレと、7 つの行政区の下で、20 のアトル（*atholhu*）に分かれる。モルディブでは固有の民族呼称は該当せず、人種構成としてはインド・アーリア人とドラヴィダ人を中心に、西北から移住したアラブ系と東南から移住したインドネシア・マレー人種（インドシナ人種（古モンゴロイド系）とオーストラロイドの混血人種）などが混血して、モルディブの住民として成り立っている。公用語はディベヒ語、住民のほとんどがイスラム教徒でスンナ派が国教ある。

かつては後発開発途上国（いわゆる最貧国）の一つであった（2011 年、経済成長により指定解除）。IMF の統計によると、2013 年のモルディブの GDP は 22.76 億ドル。一人当たりの GDP は 6,764 ドルで、南アジアでは最も高い。主産業は漁業と観光業。観光部門が GDP の約 3 分の 1 を占めており、最大の外貨獲得源でもある。リゾート島は 85 - 100 もあるといわれる。2001 年 7 月、政府は 20 年間で工業化促進を目指す「2020 ビジョン」を発表。各島は、その機能が特定されていることが多く、空港の島・ごみの島・囚人の島・観光の島など特化している場合が多い。人口を上回る数の観光客が訪れており 1999 年には 43 万人を超えた。またそれに伴い観光業は雇用も生み出しており 1999 年にはモルディブの就業人口の 14% を占めている。外国人は特別に許可された場合を除いて観光が許可されている島以外には入ることができない。

2005 年時点の農業人口は 2 万 7000 人。国土の 43.3% が耕地となっている。主要作物はココナッツ（1 万 6000 トン、2004 年）、バナナ（4000 トン）、タロイモ（350 トン）であった。単一の食品工業、ココナッツからのコブラ製造のみが確立している。2005 年時点のコブラの生産量は 2295 トンであった。一方、主食となる穀物は輸入しており、雑穀類は栽培されていない。また、約 5000 隻の漁船を擁し 16 万トン（2004 年）の漁獲高をあげている。対象はマグロ、ついでカツオで、最大の輸出品目となっている。{注：モルディブ、フリー百科事典（Wikipedia）}

このモルディブは地球温暖化というあまりに不都合な事象によって世界に知られるようになった。リース（2001）によれば、1987 年 4 月に晴天にもかかわらず、防波堤

を越えて高波が押し寄せて、国際空港の滑走路が冠水して、飛行機も流された。さらに、1991年5月には未曾有の強い暴風雨が襲い、大変に酷い被害を被った。すなわち、近年の海面上昇と珊瑚礁の死滅により、国土が消滅する危険にさらされており、海面が1m上昇すると国土の80%が失われると言われている。このためナシード大統領（2008年当時）は、モルディブの基幹産業である観光収入の一部を使って海外の土地（インドやスリランカ、オーストラリアなどが想定されている）を購入し、国民が移住できる土地を確保する意向を表明している。また、国土を盛り土することで水没を防ぐ方策も検討されている。次のガユーム大統領も海岸に防波堤を築くとともに、住民を少数の島にまとめようと転居させている。

文献

リース, B. 2001、東江一紀訳 2002、モルジブが沈む日―異常気象は警告する、日本放送出版協会、東京。